

コンスタンチノーブルでのエピソード

(チェスラヴ・チェコヴィッチの回想録より)

ウスペンスキーはコンスタンチノーブルで、ボスポラス海峡に浮かぶプリンキポ島の屋敷に暮らしていた。

ウスペンスキーの生徒たちはそこで定期的に会合を開き、ムッシュー・グルジェフもよく顔を出した。

グルジェフはいつも、静かに部屋に入ってくると、われわれを注意深く観察しながら、そこで繰り広げられている会話に黙って聞き入った。たまに彼は口をはさんだが、それはいつも、われわれをびっくりさせた。

ある日、グルジェフは、長い沈黙の後、首を振り、手ぶりを交えながら、「だが、これはみんな、たんなる哲学にすぎないではないか！」と言った。

「哲学は有益なものじゃないですか？」と、だれかが尋ねた。

「たしかに哲学はとても有益でありうるが、それには一定の限界がある。しかもそれは、フィロソフィーという言葉の本来の意味にふさわしい真の哲学の場合に限られる。残念ながら、君たちがやっているのは、無に空を注ぐようなおしゃべりだ」

「でもそれなら、ジョルジヴァンチ、私たちは何をしたらよいのでしょうか？」

「何かをするって？ 人はそのありふれた状態では意図的に何かを始めることなどできないと、前から言っているだろう。それでも人は観察し、いったい自分には何が起きているのかを知ろうとすることはできる。そのような観察だけが、ほんとうの理解につながり、そうした理解があってはじめて、人はほんとうに何かを始められるようになる」

この後、みんな自分なりの小さな発見について話さないと言った。彼はそれを「自分の小さなアメリカ発見」と呼んだ。

(Tchesslav Tchechovitch, *Tu L'Aimeras - Souvenirs sur Georgii Ivanovitch Gurdjieff*, p. 66)